

## 審査の結果の要旨

氏名 大多和 直樹

高校生の価値観と行動様式を示す「生徒文化」は、若者と学校、社会との相互の関係によって作り出される文化現象である。と同時に、それは、学校のあり方（「存立構造」）にも影響を及ぼしうる、教育を受ける側の特徴を反映するものとも見なしうる。日本の高校生の生徒文化は、1970年代以後どのように変容し、その結果、社会化エージェントとしての学校の存立にいかなる影響を及ぼしているのか。本研究は、二時点間の比較を可能とする質問紙調査などのデータを用いて、高校の階層性（「トラッキング構造」）との関係を視野に、これらの問題に実証的な解答を与えようとする教育社会学の研究である。

本論文は、序章と、1章から3章までの第1部、4章から6章までの第2部、および終章の8章で構成される。序章では、問題設定と研究方法、使用するデータについての説明が行われる。それを受けて、第1部を構成する1章～3章では、1979年と1997年に東北地方と北陸地方の2つの県における同一の公立高校11校の2年生を対象に実施された比較可能な生徒対象の質問紙調査を用いた分析が行われる。その結果、卒業後の進路意識においては、トラッキング構造と生徒の出身階層がともに影響を及ぼす基本的な構造が維持されていること（1章）、生徒文化の変容については、学校の比重の低下が見られ、地位欲求不満による学校への反抗的な態度形成が弱まっていること（2章）、社会階層の上層では「地位欲求不満モデル」が当てはまるが、下層では消費文化へのコミットメントの一環として「逸脱文化」への接近があること（3章）が明らかにされる。

このような生徒文化の変容の実態をふまえて、第2部では、2000年代に首都圏で実施された調査データを用いて、「学校主導型」から「生徒支援型」へと学校の存立構造が変化していることが解明される。その結果、消費文化へのコミットメントが高い「高校生アルバイト」たちは、学校に適応しているものの、学業への関与や進路志望は低くなること（4章）、現代の高校においては、生徒支援を通じて学校へのインボルブメント（包摂）を高めようとする指導がみられること（5章）、生徒支援の効果は、学校適応の領域にとどまり、進路形成や学業の領域までは部分的にしか波及しないこと、さらには、階層要因より家庭の暖かさといった家庭的背景によって支援に乗りやすいかどうかには差があること（6章）が明らかにされる。そして、終章では、これまでの知見をもとに、「進路のパイプライン」を軸に学校の存立を維持することの困難さが、このような学校の存立構造と生徒文化との変容を結びつけている可能性が、理論的に考察される。

以上のように、本研究は、生徒文化研究と「学校から職業へのトランジション」研究とを架橋させつつ、生徒文化の変容を学校の存立構造の変化と対応づけて解明した点で高いオリジナリティを示している。その点で、今後の教育研究に重要な貢献をなすものと考えられる。以上により、博士（教育学）の学位論文として十分な水準に達しているものと認められる。